

万物の声を聴く——海を旅するジョン・キーツ

金 澤 朋 紀

1. 旅する詩人

I purpose within a Month to put my knapsack at my back and make a pedestrian tour through the North of England, and part of Scotland—to make a sort of Prologue to the Life I intend to pursue—that is to write, to study and to see all Europe at the lowest expence. I will clamber through the Clouds and exist. I will get such an accumulation of stupendous recollections that as I walk through suburbs of London I may not see them—I will stand Mont Blanc and remember this coming Summer when I intend to straddle ben Lomond—with my Soul!—
(Keats 137)

ジョン・キーツ (John Keats 1795-1821) は、長編ロマンス『エンディミオン (Endymion)』を世に送り出したのちに、壮大な旅を敢行することを計画していた。『エンディミオン』が出版される1818年4月に友人ベンジャミン・ロバート・ヘイドン (Benjamin Robert Haydon) に宛てた上記の手紙から伺えるのは、キーツが旅の訪問地として、イングランド北部からスコットランド、さらには海を渡ってヨーロッパ大陸まで足を伸ばそうと構想していたということである。この手紙が伝えるのは、スコットランドのハイランドを見晴らすベン・ロモンドや、さらにはアルプス山脈最高峰であり数々の詩人により讃えられてきたモン・ブランにも、「魂とともに (“with my Soul!”)」登

頂して、普段のロンドンでの生活では見ることもできないような景色を見てしようと、胸を高鳴らせていた若き詩人の姿である。キーツがこれほどまでに意気込み胸を膨らませていたのは、「思い描いている新たな人生の幕開け（“to make a sort of Prologue to the Life I intend to pursue”）」を、これから始まる旅に期待していたからである。

旅とは非日常的な体験が連続する営みであり、それまでに確立していた自我を大きく揺さぶってくる活動である。その意味で、旅ほどに自己形成において影響を及ぼす体験は他にない。25歳という若さでこの世を去ったキーツが、その早熟の詩想を獲得するに至った経緯を、本稿は旅という観点から眺めてみたい。創作活動初期のキーツは、実際には海を渡ってヨーロッパ大陸を踏むことは成しえなかったが、二つの冒険をした。ひとつは読書体験を通した詩文学世界の冒険であり、もうひとつは冒頭に述べた徒歩旅行である。キーツの遍歴時代に着目し、彼の詩想形成の過程を考察する。

さらに、キーツの詩人としての成長に大きく関わったであろうもう一つの要素として、ソネットという詩形に注目してみたい。キーツは短い創作活動期のなかでもその初期に、数多くのソネットに取り組んだ。第1詩集である『1817年詩集 (Poems)』から、『エンディミオン』を発表しスコットランド徒歩旅行を終える1818年8月までに、50を超えるソネットをつくった。キーツは生涯に全部で64のソネットをつくったわけであるから、その大半がこの時期に集中して生み出されていたことがわかる。この14行定型詩に取り組んだ経験は、発展途上の若き詩人のなかでどのようにはたらいたのであるうか。

本論は、『1817年詩集』から1818年夏のスコットランド徒歩旅行までの

ジョン・キーツのソネットに焦点を当て、海の旅という観点から、キーツの成長とソネットとの関連を明らかにすることを試みる。第1詩集『1817年詩集』のソネットには、詩文学世界において海を舞台に冒険するイメージを通して、キーツの野心が表明されていたこと、そしてひとつの詩想、万物の声を聴くという姿勢が芽吹いていたことを論じる。さらに、1818年にスコットランドを旅してその原生自然——岩が展がる海や山——に実際に触れたことが、キーツの詩想にいかなる転機をもたらしたかを論じる。海を旅するキーツの遍歴の足跡を辿りながら、習作時期の詩人のソネットに吹き込まれた声を聴き、自然と交感を図ろうとした彼の姿を明らかにする。

2. 詩人の海——ホメロスのエーゲ海からぼくの太平洋へ

キーツの旅は、詩文学の世界から始まった。発展途上の若き詩人にとって、ほかの詩人の言葉に触れることは大きな意味を持つ。詩人が成長する際には様々な要素が関わるであろうが、直接的に影響を与える営みのひとつに読書体験を挙げても差し支えないだろう。若き詩人が他の作家の文学作品に感化されることは、特異なことではない。実際キーツの詩作品には、優れた文学作品、あるいは詩人そのひと自身を題材にとるものがみられる。たとえば彼は、ジョージ・ゴードン・バイロン（George Gordon Byron）や夭折の詩人トーマス・チャタトン（Thomas Chatterton）に捧げるソネットをつくっている。加えて「『リア王』をもう一度読もうと椅子に座って（“On Sitting Down to Read King Lear Once Again”）」や「キャリドア（“Calidore. A Fragment”）」といったように、ウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare）の

『リア王 (*King Lear*)』やエドモンド・スペンサー (Edmund Spenser) の『妖精の女王 (*Faerie Queene*)』など、イギリス文学の名作を読む感動もキーツは詩に認めている。

『1817年詩集』に収録された「はじめてチャップマン訳ホメロスをのぞき見て (“On First Looking into Chapman’s Homer”)」も、そうした若き日の鮮烈な読書体験を詠み込んだソネットである。1816年10月のとある晩、キーツは友人チャールズ・コウデン・クラーク (Charles Cowden Clarke) とともに、ルネサンス期の詩人ジョージ・チャップマン (George Chapman) が翻訳したホメロスの『オデュッセイア (*Odyssey*)』を読む。ギリシア語の素養が十分でなかったキーツが、ホメロスの詩行を紐解こうとするならば、英語訳を頼るしか他にない。当時は、アレグザンダー・ポープ (Alexander Pope) による翻訳が最も普及していた。しかし、新古典主義時代の詩人ポープの技巧を凝らしたヒロイック・カブレットで刻まれる華麗な翻訳に、ロマン派の若き詩人キーツは、少なからず不満を感じていた。夜を徹してチャップマン訳ホメロスを読むように読んだキーツは、翌朝友人宅から帰る道中にその感動をこのソネットにしたという逸話が残されている (Keats 54)。

「チャップマン訳ホメロス」の冒頭の4行連句で描かれる世界は、キーツのこれまでの読書体験を表している。様々な作品を読む体験が、諸国を旅する姿になぞらえられている。

Much have I travell’d in the realms of gold,
And many goodly states and kingdoms seen;
Round many western islands have I been
Which bards in fealty to Apollo hold. (1-4)

叙事詩や英雄詩など、国家を讃歌する詩文学を書き記してきた詩仙たち（“bards”）は、詩文の神アポロン（“Apollo”）に忠誠をたてた家臣であり、それぞれ独自の創作活動領域で、それぞれの創作スタイルによる作品を有している。この姿が、アポロンを祀る島（“many western islands”）を治める統治者の姿に重ねられている。そして彼らの文学作品は、彼らに固有の領土そのものに喩えられる。キーツはそうした「黄金の領地（“the realms of gold”）」や「素晴らしい国々や王国（“goodly states and kingdoms”）」を巡り歩いて（“have I travell’d”）、素晴らしい光景を目の当たりにしてきた（“[have] seen”）。このように、“Much”や“many”といった多量さで形容される、数々の文学作品を読み漁ってきた読書青年の姿は、諸国を歴訪する旅人になぞらえられる。

詩人の海には、アポロンを讃えた島々が浮かぶ。この詩人の海を代表して君臨する詩人たちの王といえ、古代ギリシア詩人ホメロスを差し置いて他にはいない。“Of one wild expanse had I been told / That deep-brow’d Homer ruled as his demesne;” (5-6) とあるように、キーツは以前から、ホメロスの治める広大な領地、すなわち彼の豊富な傑作群のことを耳にしてきたわけである。たとえば他のソネット「ホメロスに（“To Homer”）」には、このあこがれの海の詩人の声を聴くキーツの姿がある。

Standing aloof in giant ignorance,
Of thee I hear and the Cyclades,
As one who sits ashore and longs perchance
To visit dolphin-coral in deep sea. (1-4)

詩人としてホメロスに遠く及ばないことを自覚しながら、キーツはこの偉大

なる先達の声を聴く。ホメロスの口から語られる言葉は、エーゲ海のキクラデス諸島（“the Cyclades”）の響きを宿している。キーツにとってのホメロスは、伝統ある詩人の海——エーゲ海に住まう人なのである。ホメロスの語りを聴くということは、海豚珊瑚の深海を訪れること（“To visit dolphin-coral in deep sea”）のように、海の世界を探索することに置き換えられる。この意味において、ホメロスを読むことはすなわちギリシア古典が息づくエーゲ海を訪れるということに等しい。

同様に「チャップマン訳ホメロス」においても、憧憬する海の詩人ホメロスの声は新鮮味に溢れていて、その声との邂逅はキーツにとって大きな転機となる。すなわち、この声をきっかけに、若き詩人の眼が未知の世界に対して新たに開かれることとなるのである。キーツは次の6行連句において発見者のモチーフとともに、新たな海の世界を旅する。

Then I felt like some watcher of the skies
 When a new planet swims into his ken;
 Or like stout Cortez when with eagle eyes
 He star'd at the pacific—and all his men
 Look'd at each other with a wild surmise—
 Silent, upon a peak in Darien. (9-14)

18世紀末に天王星を発見したフレデリック・ウィリアム・ハーシェル（Frederick William Herschel）をモチーフにしたとされる夜空を仰ぐ天文学者（“some watcher of the skies”）の視界には、未知の新たな惑星が、天の海原を掻き分けるように飛び込んでくる（“a new planet swim into his ken”）。キーツはここで、そのような新たな世界をみる人物と自らとを重ね合わせる。同様

に、新大陸を発見した偉大な航海者コルテス（“Cortez”）¹ が、鷲のごとく鋭い眼（“eagle eyes”）ではるかに睨む（“star’d at”）のは、アメリカ大陸を挟んで、大西洋の先に広がる未知の海——太平洋（“the Pacific”）であった。

ギリシア文学の古典『オデュッセイア』を読んだ若き日のキーツは、チャップマンの援けによって、ホメロスが治める領地、いわばホメロス文学の神髄を訪れるに至った。同時にこのとき、彼はひとつの野心を胸に抱いた。それは、これまでのホメロスが続べるエーゲ海を抜けだして、太平洋のように真新しい自分の海——はく自身の言葉——を見つけ出したいという大志である。チャップマンの通訳を通してホメロスの声を聴いたキーツは、時空間を超越して現在地に立ち戻る。そしていま、ここに立つ彼自身を起点に、キーツは新たな旅に発つことを模索する。それでは、独自の詩想を確立したいという野心を叶えるために、キーツは何らかの方策をもっていたのであろうか。

「チャップマン訳ホメロス」において、最初の8行連句と続く6行連句との間では、見える風景が異なる。後者の風景のほうが、前者よりもずっと広く新しい。このような変化をもたらし、新たな地平を切り拓く契機となったのは、ホメロスの声を聴いたことであった。“On First Looking into Chapman’s Homer”という題名にもあるように、当初キーツは読書行為として書かれた文字を見ていた（“looking into”）。彼はしかし、訳者チャップマンの援けを頼りに、古代ギリシア詩人ホメロスの「大きくて勇ましい（“loud and bold”）」響きを宿した「語りの声を聴く（“I heard Chapman’s Homer speak out”）」多感なキーツの耳には、紙面に浮かぶインクからですら、音の響き——あるいは人の声——が届いてくる。この万物の声を聴くという詩人の態度に注目し

ながら、『1817年詩集』に収録されたソネット群をさらに分析する。

3. 万物の声を聴く

「チャップマン訳ホメロス」は、キーツの第1詩集である『1817年詩集』に、ソネット連作のひとつとして収録されている。キーツにとって『1817年詩集』は、自らの基本的な姿勢を語った作品だ。この詩集には全部で21のソネットが収められている。一方で『エンディミオン』を経て出版された第2詩集『1820年詩集 (*Lamia, Isabella, The Eve of St. Agnes and Other Poems*)』にはオードや中編物語詩、叙事詩が収録されているが、ソネットは一篇も含まれていない。

ヘレン・ヴェンドラー (Helen Vendler) は、キーツという詩人は、ソネットという詩形に拘り続けて、自分の作風を確立していった若き詩人であると説明する (“Keats is an example of the young poet who finds his voice by persistently composing in a single inherited form—in Keats’s case, the sonnet—until he has made it his own” : 43)。成長途上のキーツにとって、ソネットは自分の詩才と向き合い表現するための恰好の練習場であった。そこで『1817年詩集』のソネット群を精査し、基調となる特質を抽き出すことで、キーツの試みていた創作態度を明らかにする。キーツの最初期のソネット群に焦点を当てることにより、彼がソネットに期待した役割を考察する。

キーツのソネットでは、自然の声を聴こうとする態度が繰り返し描かれる。たとえば、「弟ジョージに (I, “To My Brother George”)」² は、キーツが弟ジョージに寄せて、その日に自然と向きあう中で出会った不思議な感覚体

験について語る詩である。キーツが目目の当たりにした驚異とは、たとえば太陽（“the sun”：2）がまるで口づけをするかのように（“kist away”：2）その光と暖かさで朝露を払ったこと、傾く黄金の夕陽（“the feathery gold of evening lean”：4）に、月桂冠を戴く貴人の姿（“the laurel’d peers”：3）をみたこと、などである。いずれの描写においても興味深いのは、自然事物があたかも人間のように描写されていることである。キーツは、自然の振る舞いに人の姿を認めて心を奪われ、不思議の念を抱く。

冒頭の4行連句で空の風景に注目をしたあと、続く4行連句では詩人は一転して視線を落とし、水平に広がる海を眺める。さまざまな姿を抱える海の様子をじっと眺めるうちに、いつしか詩人の耳にはその光景が声となって届く。

The ocean with its vastness, its blue green,
Its ships, its rocks, its caves, its hopes, its fears, —
Its voice mysterious, which whoso hears
Must think on what will be, and what has been. (5-8)

海は広大で、碧藍に輝き、船を浮かべている。そして打ち寄せる波は、岩礁と洞穴を造り、そして海は、希望と恐怖とを提示する。列挙される大洋の光景は、当初詩人の目に映っていたものである。いつしかそれらは、視覚でとらえられるものから聴覚で感じられるものへ、すなわち目で掴むのではなく耳に届く、「謎めいた声（“Its voice mysterious”）」へと変容する。この海の「謎めいた声」を聴きながら、詩人を支配する時間感覚は揺らぎ、その思考は未来へと延びるようにそして過去へと遡るように拡張されていく。海の声の前に、詩人の意識はなされるがままに、いま、ここを越え、「これまで

（“what has been”）」と「これから（“what will be”）」とに向かって時間軸の上を自由に往來する。

キーツは視覚からの感覚受容から次第に聴覚での感覚受容へと傾いていき、自然事物のなかに人の声を聴こうとする。太陽に詩神アポロンの姿を認め、時間認識力に揺さぶりをかける海の「謎めいた声」に誘われた8行連句に続けて、次の6行連句の冒頭においてもこの語りは受け継がれ、詩作を試みる美しい月夜に、キーツは「月の女神（“Cynthia”：10）」の姿を認める。詩人は、窓の外に浮かぶ月が雲間から見え隠れする様子（“half-discovered”：12）に、初夜の花嫁の初々しい姿を重ね合わせる。

しかし、この自然事物に神話の神を見出そうとする夢想的な態度は、キーツの詩想の最も核心部に座る姿勢ではない。ゆえにこのソネットは、以下のような結びのカプレットでまとめられる。

But what, without the social thought of thee,

Would be the wonders of the sky and sea? (13-14)

どんなに自然事物が美しく、魅力的であっても、それがわれわれ人間の世界（“social thought”）と関わってこないならば、それは何の意味もない。1818年3月に友人へあてた手紙の中で“Scenery is fine—but human nature is finer”（Keats 130）と述べるように、キーツにとっては、自然の不思議に心を動かされることよりも、あくまで人と交わることのほうに関心がある。ゆえにキーツの風景詩が描く自然は、人のように振舞う。『1817年詩集』のソネットについてもこのことはよくあてはまる。キーツの家の暖炉の熾火は囁き（VIII, “whispers”：3）、風もうそぶき（IX, “Keen, dreadful gusts are whisp'ring”：1）、薔薇の花束は優しく語りかけてくる（V, “Soft voices had they, that with tender

plea / Whisper'd of peace, and truth, and friendliness unquell'd" : 13-14)。キーツは自然事物を題材にとり、それらの声に耳を傾ける。キーツにとっての自然とは、人間の生活と深くかかわってこそ意味を持つものであり、だからこそまわりの自然のなかに、人の姿を認めようとするのである。

キーツが描く自然には、人の姿が重なってみえることが観察できた。詩人は自然事物の中に、この万物の中に人の声を聴かんとする態度こそ、若き日のキーツがソネット創作に取り組む中で、固持していた一つの姿勢といえよう。

「チャップマン訳ホメロス」で表明したように、詩人として独自の地位を確立しようと意気込んでいたキーツは、この万物の声を聴く姿勢とともにもうひとつの旅にでる。それが1818年夏のスコットランド旅行であった。詩文学世界の冒険では飽き足らず、詩人として新たな境地を切り拓くために、キーツは実体験を欲していた。文学世界における虚構の冒険と決別し、現実の冒険へとキーツは旅立つ。

4. ロックが聴こえる——キーツのスコットランド旅行

自らを「カメレオン詩人（“the camelion Poet” : Keats 295）」と称するよう
に、数々の先達の文学作品を読み、その文体を真似することができたところ
に、キーツの詩的才能が認められる。しかし同時に彼は、読書体験の限界
と、実体験の不足とを感じていた。紙面に向かって想像を逞しくし、本の世
界を旅していた文学青年は決意を固め、自らの成長のために、“to make a sort
of Prologue to the Life I intend to pursue” (Keats 137) と意気込んで、『エンディ

ミオン』をロンドンの書店に置くと、その足でスコットランドに実際に旅に出る。

キーツの新たな詩的創造においておおきな転機となったのは、1818年の夏であった。キーツは友人チャールズ・ブラウン（Charles Brown）からの誘いに乗り、ブリテン島北部へと総計2000マイルにも及ぶ徒歩旅行に出かけた（Walker 1）。行路はランカスターを出発地点に、北イングランドを通過して、途中北アイルランドに寄り道をしながら、スコットランドの北端までいく、というものであった。彼ら二人は1818年の6月末にロンドンを発ち、およそ海岸線に沿って歩いて行った。ヘブリディーズ諸島を進んでいた二人だが、キーツの体調不良が続いたため、出発から3か月後の8月にスコットランド北端のジョン・オ・グローツ到着をもって旅を打ち切り、予定を切り上げて船にてロンドンへの帰路に就いた。この過酷な旅行の代償として、キーツは寿命を縮めることとなったのである。

旅の道中の1818年7月10日、スコットランド西部ガーヴァンにある旅の宿で、ひとつのソネットが生まれた。「アイルサ・ロックに（“To Ailsa Rock”）」と題を冠せられたその作品について、弟トム（Tom Keats）に宛てた手紙の中でキーツは以下のように説明している。

... At the end we had a gradual ascent and got among the tops of the Mountains whence in a little time I described in the Sea Ailsa Rock 940 feet height—it was 15 Miles distant and seemed close upon us—The effect of ailsa with the peculiar perspective of the Sea in connection with the ground we stood on, and the misty rain then falling gave me a complete Idea of a deluge—Ailsa struck me very suddenly—really I was little alarmed—Thus far had I written

before we set out this morning—... [A copy of “To Ailsa Rock”]... This is the only Sonnet of any worth I have of late written—I hope you will like it.
(Walker 179-80)

アイルサ・ロック³は海に浮かぶ標高940フィートほどの岩島であり、沿岸から15マイルほど沖合にある。霧雨に濡れながら沿岸の山の頂上からみた岩島は、周りの海の風景とも相まって、キーツに「大洪水というものの完全なる概念（“a complete Idea of deluge”）」を与え、彼に筆を執らさずにはおかなかった。以下に、作者自身から「最近書いた中で、唯一価値のあるソネット」と説明されたこの作品を考察する。⁴

「アイルサ・ロックに」は、『1817詩集』に収録されていたソネットとは一線を画している。このソネットは、迫真に満ちた自然への語りで幕開けを開ける。

Hearken, thou craggy ocean pyramid,

Give answer by thy voice, the sea fowls' screams! (1-2)

キーツはアイルサ・ロックに対して、「聴け（“Hearken”）」と呼びかける。さらに、「お前自身の声（“thy voice”）」によって「答えてくれ（“Give answer”）」とこの眼前の岩礁の交感をのぞむ。この姿勢は、今までの彼の作品には見られなかった態度だ。すなわち、これまでは自然事物にひとの姿を見出し、聴こえてくる声に悠然と耳を傾けるだけであった詩人が、いまや、積極的にその対象に語りかけ、対話をしようと試みているのである。たとえば「海に（“To the Sea”）」というソネットは、この旅の前年の1817年に、キーツがイギリス南東部の海に浮かぶワイト島を訪れた際につくられたものであるが、そこでは従来通り、眼前の風景に静かに耳を傾けている。彼の耳には、岸に

打ち寄せる波の囁き (“eternal whispering around / Desolate shores” : 1-2) が聴こえてくるし、海岸近くの洞窟にその波が打ち寄せれば、ギリシア神話の女神ヘカテーの魔法の響きや (“the spell / Of Hecate leaves them their old shadowy sound” : 3-4)、海のニンフたちのコーラスが届いたりする (“the sea nymphs quired” : 14)。

翻って「アイルサ・ロックに」では、キーツは冒頭から冷静さを失って呼びかけ、必死に応答を願う。というのもそれは、詩人には岩の声が聴こえないからである。

Thou answer'st not, for thou art dead asleep;

Thy life is but two dead eternities,

The last in air, the former in the deep—

First with the whales, last with the eagle skies; (9-12)

いくら問いかけてみても、岩礁は応答しない。それは岩礁が眠っている (“dead asleep”) からだと、キーツは解釈する。アイルサ・ロックという存在は、「ふたつの死せる永遠 (“two dead eternities”)」である。今では鷺の棲まう海上で眠って (“airy sleep” : 6) いるが、かつては鯨の棲まう海底で眠っていた (“fathom dreams” : 6)。この岩礁は、海底から海上へと持ち上げられた (“heave” : 6) 存在であるというのがキーツの認識である。

実は、岩礁のこの成立過程にこそキーツの関心があり、また岩礁と交感することができない理由がある。岩礁をその作用主として挙げられていた “the mighty power” (5) の正体が、この作品の結びに明かされる。

Drown'd wast thou till an earthquake made thee steep—

Another cannot wake thy giant size! (13-14)

海の底深くに眠っていたアイルサ・ロックを海上に現前せしめたのは、「地震（“an earthquake”）」であった。決して、魔法やギリシア神話の神によって生み出された幻ではない。現実の岩（rock）とは、地球の物質的な運動によって、大地が揺さぶられる（rock）ことによって産み出されて存在しているものであったのだ。“Ailsa Craig”と呼ばれているこの岩礁に、“Ailsa Rock”という名をキーツが与えたのは、詩人の心をこのように揺さぶる対象への感動を、彼がもしかしたら反映させようとしていたからなのかもしれない。先の弟トムへの手紙で“Ailsa struck me very suddenly”といていたように、アイルサ・ロックから受けた生々しい、大地の運動の実感にこそキーツは感銘を受け、心を揺さぶられたのであった。

スコットランドの原生の海に浮かぶアイルサ・ロックを前に、キーツは現実世界の物質としての自然を目の当たりにする。その自然が、今まで慣れ親しんできた文学世界の自然とは異なっていることを知り、詩人はその自然に他者なるものを認めて、対象との距離を覚える。しかしこの「ロンドンでは体験できない」（Keats 137）生の自然こそ、この旅に期待していたものであり、そこに新しさと価値とを認める。ゆえに、アイルサ・ロックにも人の姿を認め、異質なものとして退けるのではなくむしろ断絶感を越えて呼びかけ、この自然と交感を図ろうとしたのであった。

5. ブリティッシュ・ロマンティック・ロック

キーツは、アイルサ・ロックの海を後にすると、山岳地帯へとさらに旅を続けた。ほどなくしてブリテン島最高峰ベン・ネヴィスに登頂すると、彼は

その山頂の断崖絶壁にてソネット「詩神よ、教えを授けたまえ（“Read me a lesson, Muse, and speak it loud”）」をつくる。岩と霧とに包まれながら、原生自然と精神世界とを往来する詩人の姿は、のちに『ハイペリオン（Hyperion）』にて、岩山の上で詩神を仰ぐハイペリオンの姿として登場することとなる。1818年夏にスコットランド旅行で物質的自然との交感を重ねるなかで発見した。詩的靈感の源泉としての岩は、キーツの新たなモチーフとして、後年の作品にたしかに結実することとなった。

イギリス・ロマン派の詩文学における岩の表象は、時間の有限性と無限性をテーマにする際に重要な役割を担うことが多い。たとえばパーシー・ビッシュ・シェリー（Percy Bysshe Shelley）の「オジマンディアス（Ozymandias）」におけるラムセス像の台座は、過去の栄光と盛者必衰の理を伝えているし、ワーズワス（William Wordsworth）も墓石に刻まれた真摯な言葉としての墓碑銘に注目し、『墓碑銘論（“Essays upon Epitaphs”）』を記した。また、ノア・ヘリングマン（Noah Heringman）の *Romantic Rocks, Aesthetic Geology* など、近年の研究動向としても、岩の表象がますます注目を浴びている。キーツの詩作品における岩の表象に耳を傾けることで、イギリス・ロマン派の新たな声が聴こえてくるかもしれない。

注

1. ヨーロッパ人で初めて太平洋を発見したのは、実際にはコルテスではなく、スペインの探検家バルボア（Vasco Nunez de Balboa）であると言われている。
2. なお、本論中で用いられるローマ数字は、『1817年詩集』のソネット連作に割り当てられた通し番号に対応する。

3. アイルサ・クレイグ島 (Ailsa Craig) ともいう。島全体が約5億年前に活動していた死火山の岩頸からできている。
4. テキストは、旅行中に弟トムに宛てた手紙の中に付されているものと、後にリー・ハントが出版した *Literary Pocket-Book for 1819* (1818) の二つが存在するが、旅行最中のキーツ自身により接近するため、本論では前者を採用する。

Works Cited

- Heringman, Noah. *Romantic Rocks, Aesthetic Geology*. Cornell UP, 2004.
- Keats, John. *Keats's Poetry and Prose: Authoritative Texts, Criticism*. Edited by Jeffrey N. Cox. W. W. Norton, 2009.
- Shelley, Percy Bysshe. *Shelley's Poetry and Prose: Authoritative Texts, Criticism*. Edited by Donald. H. Reiman. W. W. Norton, 2002.
- Vendler, Helen. *Coming of Age as a Poet: Milton, Keats, Eliot, Plath*. Harvard UP, 2003.
- Walker, Carol Kyros. *Walking North with Keats*. Yale UP, 1992.
- Wordsworth, William. *The Prose works of William Wordsworth*. Eds. W.J.B. Owen and Jane Worthington, 3 vols. Clarendon, 1974.

